

勤務医部会だより

サンダース軍曹のリーダーシップ



幹事 服部直樹
(豊田厚生病院)

子供の頃、日曜の午後はアメリカのテレビドラマ「コンバット」を見るのが日課になっていた。父親がゴロリと横になって、煙草を燻らせながら見ており、仕方なく付き合っていた。1960年代、「大脱走」や「史上最大の作戦」、「バルジ大作戦」など戦争映画のハリウッド大作が次々と誕生し、上映後まもなくテレビ放映され、何度もお茶の間に登場していた。血湧き肉躍る戦争映画は子供に大人気で、翌日にはキングタイガーやM4シャーマンなどの高性能戦車やスピットファイアーやメッサーシュミットなどの名戦闘機の話で盛り上がっていたものである。これらの大作戦争映画とはやや趣を異にして、「コンバット」は毎回ドラマ仕立てで、時にヒューマニズム溢れるシーンもあり、やむなく父親に付き合っているというよりは実は面白くてワクワクしながら見ていたものである。

ヴィック・モロー演じるサンダース軍曹は子供達にとって最高のヒーローであり、学校が終わって友達同士が空き地に集まると決まって戦争ごっこが始まるのであった。「コンバット」の物語はノルマンジー上陸作戦から始まる。舞台はフランスの農村である。戦闘の合間、サンダース軍曹は無線で「チェックメイトキング応答よろしく、こちらホワイトロック」と叫ぶ。子供心に格好いい。大作映画のように軍司令官だの参謀総長だのは出て来ず、数名の小隊による戦闘シーンが主体である。父親にこの人たちは何なのと聞くと、これは偵察部隊のようなものだと答える。なるほど、これは最前線の精鋭部隊なのだと妙に納得したものである。部下にはケーリーとかカービーとかリトルジョンとかがいる。彼らは二等兵とか上等兵である。いわゆる無名の名もなき兵士を描いている。

サンダース軍曹はたたき上げの鬼軍曹である。腕は良く、勇敢である。しかも部下の面倒見がいい。敵と対峙すると冷静に状況を判断して、潮目を見計

らい、チャンスと見るや素早く攻撃を開始する。自ら先陣を切って突入するのが頼もしい。口癖は「援護しろ」、つまり俺が先に行くからお前たちは後方から援護しろという訳である。こんな上司は今日本を見回していてもなかなか見当たらないだろう。アメリカ陸軍歩兵隊の話ではあるけれど、日本人の小学生にも心迫るものがあった。サンダース軍曹の上官はリック・ジェイソン演じるヘンリー少尉である。大学卒のエリートでサンダース軍曹とは育ちが違う。しかも上官の命令には絶対服従しなければならない。サンダース軍曹に中間管理職の悲哀を父親自身感じ取っていたのかも知れない。

3年前に院長に就任した際、指導論やらコーチングやら数多ある書物をめくってみたがどれもじっくりこない。書評で目にしたのが、元外交官による「危機の指導者チャーチル」であった。首相になるまでは決して順調満帆ではなく、苦汁をなめた時期もある。万が一にも首相になった場合に備えて、ありとあらゆる知識を貪欲に吸収していた。臥薪嘗胆の末、首相まで登り詰め対独戦争ではイギリス存亡の危機に際し、類稀なるリーダーシップを発揮した。チャーチルはそれまでの侃侃諤諤の議論を廃して、迅速に決定することを重視した。まさに危機の指導者だった訳だが、平時の訪れとともに、選挙であっさり負けてしまった。英雄的な指導者であるが、流石にチャーチルは参考にはならない。あの日曜日の午後、子供心を掴んだサンダース軍曹こそリーダーシップのお手本なのだとしみじみ感じる今日この頃である。